



湖月抄

ちのり本





九曜文庫



推本

寧臨二

卷名を改めたりと号とて刻する人強く其のこゝに  
推がらむとひまゝに版より取りにきつて改巻と稱は  
の次年也。蓋宰相は如く四年めりなり。細蓋九二  
葉の表より次のところまで三葉の裏まで、の事也。然る  
に表より不用之。蓋曰

さうして此の如く行ふ事  
心の安んずる事よ

心のかみしるをよ

細  
宿願を遂げしむ

子

空洛のこころに中富り  
 並宿新きて泰陽又ハ  
 空洛文のこころをゆく  
 くちひて出ぬこころ細南都  
 の清幸るこころと中富り  
 一は五ふふふふふハハハハ  
 の形ありて去回空洛役  
 るこころと中富りとせしこころ

三

細  
長  
振  
々

新下子含めり花名

一  
三  
五  
七  
九  
十一  
十三  
十五  
十七  
十九  
二十一  
二十三  
二十五  
二十七  
二十九  
三十一  
三十三  
三十五  
三十七  
三十九  
四十一  
四十三  
四十五  
四十七  
四十九  
五十一  
五十三  
五十五  
五十七  
五十九  
六十一  
六十三  
六十五  
六十七  
六十九  
七十一  
七十三  
七十五  
七十七  
七十九  
八十一  
八十三  
八十五  
八十七  
八十九  
九十一  
九十三  
九十五  
九十七  
九十九  
一百

三才圖會

子

嘉慶二年二月

文康七年七月

華の時來迄の如ふ

人の心は月の如く

是乃里の名つとて

孟子定都孟國唐八都

のりこちそふくせう

志と心とをいふ

五

二月の廿日乃程よ、無事の交ふ所なり

あうで給古<sup>ち</sup>に形<sup>がう</sup>うりまねと功<sup>こう</sup>が

とくぞう年ぶらりよきとぞ

のうらめしやどりのゆうこよ。

三休手文龍之  
此よりいりて母をれとてふとてふ！

いふとふかきありき里名

のうへに  
しんが  
ありう  
ゆふさ  
なも

白文の西行さうし  
 えんさうめ

月 廿二日

[illegible]

中  
ふりて  
心  
力  
を  
用  
ひ  
し  
る

今の手筆

七

11



細

都下名物考

細

六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

夕暮より自より寝無きまゐる人

てすふよちうけえさあうがも

人ふあひてはまづうまへくおちと

多代俄より物忌のよりつゝ

くやきれたえきうぬうのうと

よりより。交る海と海と

之

此所定之文、海軍省に在りて

細  
美

いふは事根の中にも今回の所をいふ

白雲のそと

新ハホシ  
ニ中々  
ヤ  
テ

三  
家  
集  
の  
上  
巻  
作  
人  
み  
は  
な

卷之六

ふゆぬおとどららてえよ

[illegible]

くまのけしき

細  
夕方の内と

う  
ズ  
ど  
ト  
え  
し  
て  
ズ

[illegible]

將願少將茲人の無藩乃とけんとこれ

[illegible]

えまゐるゐるわい<sup>おのゝ</sup>ちこのゆきとて

限るふくらずと六条院の如くさへいけ

まぐの人もまぐの意よう

よせつゝうらなひ。取よつてゐる。

とうのちよせ  
 孟 句 文 道 々 書 下  
 りて 咄 ちやけと うを  
 うて 八 家 教 ありと 系  
 子 記 へ

佳

23.8



ぬきし世のまへへ  
 見たりなりとまれん  
 細いまきをかきまづ  
 花宇治渡る平賀渡と  
 りて一河ひくひとひ  
 里のまきほよりこき  
 されへぬそととと  
 今も今も今の橋の  
 見たりととと  
 よい風よ 師 父の書と唱と

うとろり 細  
うとろり 細

りの中への  
 細 葉の落  
 のきと、波仕のくきよ似  
 くりくりり 柳よは通  
 くりぬく  
 衣よひきくくりりよけ  
 るや 毛も八文の独こ  
 りまふ細くむく 髪結  
 るぐくくくくくくく  
 くりくりくりり

しきよけつとて、一のふさふさは、二の  
 ぐんぐん三と、四のひるひる五と、六の  
 ぐんぐん七と、八のひるひる九と、一〇の  
 ぐんぐん一一と、一二のひるひる一三と、一四の  
 ぐんぐん一五と、一六のひるひる一七と、一八の  
 ぐんぐん一九と、二〇のひるひる二一と、二二の  
 ぐんぐん二三と、二四のひるひる二五と、二六の  
 ぐんぐん二七と、二八のひるひる二九と、三〇の  
 ぐんぐん三一と、三二のひるひる三三と、三四の  
 ぐんぐん三五と、三六のひるひる三七と、三八の  
 ぐんぐん三九と、四〇のひるひる四一と、四二の  
 ぐんぐん四三と、四四のひるひる四五と、四六の  
 ぐんぐん四七と、四八のひるひる四九と、五〇の  
 ぐんぐん五一と、五二のひるひる五三と、五四の  
 ぐんぐん五五と、五六のひるひる五七と、五八の  
 ぐんぐん五九と、六〇のひるひる六一と、六二の  
 ぐんぐん六三と、六四のひるひる六五と、六六の  
 ぐんぐん六七と、六八のひるひる六九と、七〇の  
 ぐんぐん七一と、七二のひるひる七三と、七四の  
 ぐんぐん七五と、七六のひるひる七七と、七八の  
 ぐんぐん七九と、八〇のひるひる八一と、八二の  
 ぐんぐん八三と、八四のひるひる八五と、八六の  
 ぐんぐん八七と、八八のひるひる八九と、九〇の  
 ぐんぐん九一と、九二のひるひる九三と、九四の  
 ぐんぐん九五と、九六のひるひる九七と、九八の  
 ぐんぐん九九と、一〇〇のひるひる一〇一と、一〇二の  
 ぐんぐん一〇三と、一〇四のひるひる一〇五と、一〇六の  
 ぐんぐん一〇七と、一〇八のひるひる一〇九と、一〇の  
 ぐんぐん一一一と、一一二のひるひる一一三と、一一四の  
 ぐんぐん一一五と、一一六のひるひる一一七と、一一八の  
 ぐんぐん一一九と、一二〇のひるひる一二一と、一二二の  
 ぐんぐん一二三と、一二四のひるひる一二五と、一二六の  
 ぐんぐん一二七と、一二八のひるひる一二九と、一三〇の  
 ぐんぐん一三一と、一三二のひるひる一三三と、一三四の  
 ぐんぐん一三五と、一三六のひるひる一三七と、一三八の  
 ぐんぐん一三九と、一四〇のひるひる一四一と、一四二の  
 ぐんぐん一四三と、一四四のひるひる一四五と、一四六の  
 ぐんぐん一四七と、一四八のひるひる一四九と、一五〇の  
 ぐんぐん一五一と、一五二のひるひる一五三と、一五四の  
 ぐんぐん一五五と、一五六のひるひる一五七と、一五八の  
 ぐんぐん一五九と、一六〇のひるひる一六一と、一六二の  
 ぐんぐん一六三と、一六四のひるひる一六五と、一六六の  
 ぐんぐん一六七と、一六八のひるひる一六九と、一七〇の  
 ぐんぐん一七一と、一七二のひるひる一七三と、一七四の  
 ぐんぐん一七五と、一七六のひるひる一七七と、一七八の  
 ぐんぐん一七九と、一八〇のひるひる一八一と、一八二の  
 ぐんぐん一八三と、一八四のひるひる一八五と、一八六の  
 ぐんぐん一八七と、一八八のひるひる一八九と、一九〇の  
 ぐんぐん一九一と、一九二のひるひる一九三と、一九四の  
 ぐんぐん一九五と、一九六のひるひる一九七と、一九八の  
 ぐんぐん一九九と、二〇〇のひるひる二〇一と、二〇二の  
 ぐんぐん二〇三と、二〇四のひるひる二〇五と、二〇六の  
 ぐんぐん二〇七と、二〇八のひるひる二〇九と、二一〇の  
 ぐんぐん二一一と、二一二のひるひる二一三と、二一四の  
 ぐんぐん二一五と、二一六のひるひる二一七と、二一八の  
 ぐんぐん二一九と、二二〇のひるひる二二一と、二二二の  
 ぐんぐん二二三と、二二四のひるひる二二五と、二二六の  
 ぐんぐん二二七と、二二八のひるひる二二九と、二三〇の  
 ぐんぐん二三一と、二三二のひるひる二三三と、二三四の  
 ぐんぐん二三五と、二三六のひるひる二三七と、二三八の  
 ぐんぐん二三九と、二四〇のひるひる二四一と、二四二の  
 ぐんぐん二四三と、二四四のひるひる二四五と、二四六の  
 ぐんぐん二四七と、二四八のひるひる二四九と、二五〇の  
 ぐんぐん二五一と、二五二のひるひる二五三と、二五四の  
 ぐんぐん二五五と、二五六のひるひる二五七と、二五八の  
 ぐんぐん二五九と、二六〇のひるひる二六一と、二六二の  
 ぐんぐん二六三と、二六四のひるひる二六五と、二六六の  
 ぐんぐん二六七と、二六八のひるひる二六九と、二七〇の  
 ぐんぐん二七一と、二七二のひるひる二七三と、二七四の  
 ぐんぐん二七五と、二七六のひるひる二七七と、二七八の  
 ぐんぐん二七九と、二八〇のひるひる二八一と、二八二の  
 ぐんぐん二八三と、二八四のひるひる二八五と、二八六の  
 ぐんぐん二八七と、二八八のひるひる二八九と、二九〇の  
 ぐんぐん二九一と、二九二のひるひる二九三と、二九四の  
 ぐんぐん二九五と、二九六のひるひる二九七と、二九八の  
 ぐんぐん二九九と、三〇〇のひるひる三〇一と、三〇二の  
 ぐんぐん三〇三と、三〇四のひるひる三〇五と、三〇六の  
 ぐんぐん三〇七と、三〇八のひるひる三〇九と、三一〇の  
 ぐんぐん三一と、三一二のひるひる三と、三の  
 ぐんぐん三と、三二のひるひる三と、三の  
 ぐんぐん三と、三三のひるひ







雅

花村上御記應和元

細  
八五

[illegible]

益者よりを樂を  
ふくむへね  
何となくまゐり

[illegible]

細  
製良應々

細曲與新多引之師珍







堀又とをぬかりとてとく 師 花ゆ人の中ぐぬらん けふさくらざとあけとて  
 世とをてとてと 細 河海に奇不叶花さうらにさうらにさうらの山をすていあさうらと  
 かり 孟月 河海はわさうらとて何句うらん 秋の夢はいづれよりさうらにさうらに 尾花と  
 花の夢のさうらとて又わらと何あかりんのさうらとてさうらとてさうら  
 けふ月 月も 後 花の月 月  
 のさうらとてさうらとてさうらとて  
 しうらとてさうらとて  
 とのさうらのさうらとて

者大納言 細 紅梅よりよ  
 上の作よりよきより強  
 たり。業々れよりよりよ  
 子よりよき 孟 業々れ  
 よりよき 若大納言よりよ  
 せよきよりよき。紅梅より  
 良き

とがうーびよらうくあくるいさうりげは  
川風とうろけぬふねは吹うよめい  
もどきおがりうくわそび泣はひんり  
藤人納えぬわざごとくまきまりぐで  
わちこまりつづむいのさうーそて  
ひろり結ぶるさんごわづどうりもの  
こそれもろゝ<sub>細</sub>  
あくとゆわと<sub>細系子地</sub>花盛みそく四角の履も  
まぎめやうゆづのふあわようのりや  
まゝのも奇どもとゆわうれど  
<sub>車子地也</sub>

[illegible]

とうひもさうぬまり。あはれぐさそぞろ  
 まうもえいひやもどまりあはれわだ  
 文いぬ<sup>細</sup>てぞるづてとれ文とつね  
 はありきり。さあもさう紙とさえさくわさ  
 まの細く  
 けさうさうてとりくるさう中さう  
 とさめさあもぬぐーいすさあさ  
 みさうれづらんるさう<sup>細</sup>後ぐれとあ  
 らぬもさうひるありとさう<sup>細</sup>の時  
 中のさうさう<sup>細</sup>後さう<sup>細</sup>のさう  
 ばれさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさう  
 さうさうさうさうさうさうさう



中ぐらゝめさあもなりぬー 異 子もなまをけさゝぐらそゝなりぬー  
又秋もふとめささるやう物とし 細田 師 方くもふよあまぬさ  
さささよのつぬのけささめさてりてさてさささあやゝ思ふさささ  
さささささささささささささささささささささささささ  
の我は思ふさささささささささささささささささささ  
いともさささささささささささささささささささささ

虎こやう山里の茶すけがぶのまけつれく 上東門改が稱  
 へるがめねび 細八まのほろくし師 姫恋まのまへ ねびさへ

も中くうろづうーうー海みとかんをほ  
細くうろみわんと  
 ーくわーーくわーさーこのおらと

ごとくお中のみおこしにてお終りなまを  
 ひとりつしとまゝとさうさるる物心（念ふ）

[illegible]

そめうら妙入孟回

あそくあがりてゆきさうひつゝいふを  
しめこむと云はれ世よりいとどめ給ん  
後世の世用とし  
よづかしといふこと我のものかかせば済とくみ  
格別のよし

通みもいひさめぬづき紙でこ  
 孟娘志望の事と八雲の内ふとあつて  
 のね〜〜りのいもく〜く〜く〜く〜く  
 固まれば  
 といふづ〜とあれど、今や〜とて

終るんはうらうらと暮るんとてむす  
 人とてうらうらとてゆく哉やうらう  
 はいあゝとてとてとてのめよとても人  
 うらあゝとてとてとてとてとてとて  
 とのひとのまぐらうらうとてとて  
 うらあゝとてとてとてとてとてとて



型　　の　　三便  
のやうに　　人  
ありとく

子よりよくみるめ  
 ありてかりせとも  
 ときよく因縁は流  
 めをわづらひて  
 ようくくくひと  
 し

[illegible]



























掛鐘

卷六

卷之四

卷七

[illegible]



まらんまらん

ひりく 四倍りや

せく荷衣まんのす  
の何よりわり 五  
よりひりくより

これより 三  
まのまも 三  
れよりいともあり

ふりく 師  
まのせられい  
ひりく 別ては

しとのま

ふりく 三  
五八宮  
いぬいふり  
ふりく 八  
ふりく 八  
ふりく 八

とておる

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん

まらんまらん







指

美

細  
如  
志

如左の

八五の

聖前よりついでに  
 しくくさり

卷一

油

ハ文亮一より所志と

有るが世

ふたつとろろでうくな







世の勢ふよつてくも候と信ぜよまうて時あふは八代神の候をうめ  
 ーしうまうとをこめくろくしを信ぜよまうと信ぜよまうと  
 候の勢と 孟 世をばまうの勢と信ぜよまうと信ぜよまうと

三才圖會

姫君達と侍女房等  
のさゆゝつひくゝあ

うきものそと

孟ふそ中陰あう上

又非君望の旁に  
もあら

がひねんとさうふんぞうちやそ

くさくさうさうさうさう

ふうふと念仏のそとをひておりぬ

そつとへゆへにうきよきなりけり

時どきありつゝ中つらゝんどのちい

よころゝろぎりあそねはともてい

てふ事。昔々よりと云ふ事あり

笑ふは、  
のちうき  
笑ふ人

五路より舟に上りて中納言より入

よきとわらふる代我といふもあはれ

らるるゝとく<sup>つ</sup><sub>て</sub>

紫のうりよ。あまをむづくらせ給ふ人。

て、徳ぎくしち徳くけくしち徳のねを

うゑるびんをさへあらはれぬ

アキハクランハミモソノ娘

世に源とひさのやとゆがやうてや

あひくうとて げまふらば ぬ ぬらなり ぬ ぬつと

白  
とくく秋の山里いづる人ニ秋

象のうら夕雲とて今の電乃親とて

[illegible]

すくそそむる  
細きすそむる

卷之二



神

卷之四

細  
款  
之  
也

新漢の書

中玉の如し

歟ハ限ある物とし

婦志の如く

卷之四

五  
西  
東  
南  
北  
中

助字之







とく  
一とこの後よ 八家のありけり  
くれまかりしすめ 依りてあふ  
親達のあふしも 依りてあふ  
明 面ゆき 顔く 盛る  
月之 花 蘭 相 女 子 趙  
壁 二 三 四 五 六 七 八 九  
一 二 三 四 五 六 七 八 九

わがこころ 中まわ  
ひ 娘 志 進 勢 中 女 子  
こころ 中まわ  
ふ 二 三 四 五 六 七 八 九  
うの 中まわ  
その 中まわ

一と 風 情 中まわ  
う 二 三 四 五 六 七 八 九  
て 二 三 四 五 六 七 八 九  
男 二 三 四 五 六 七 八 九

ひん 二 三 四 五 六 七 八 九  
う 二 三 四 五 六 七 八 九  
張 二 三 四 五 六 七 八 九  
や 二 三 四 五 六 七 八 九  
礼 記 二 三 四 五 六 七 八 九  
居 二 三 四 五 六 七 八 九  
松 二 三 四 五 六 七 八 九  
五 二 三 四 五 六 七 八 九

とく  
一とこの後よ 八家のありけり  
くれまかりしすめ 依りてあふ  
親達のあふしも 依りてあふ  
明 面ゆき 顔く 盛る  
月之 花 蘭 相 女 子 趙  
壁 二 三 四 五 六 七 八 九  
一 二 三 四 五 六 七 八 九

わがこころ 中まわ  
ひ 娘 志 進 勢 中 女 子  
こころ 中まわ  
ふ 二 三 四 五 六 七 八 九  
うの 中まわ  
その 中まわ

ひん 二 三 四 五 六 七 八 九  
う 二 三 四 五 六 七 八 九  
張 二 三 四 五 六 七 八 九  
や 二 三 四 五 六 七 八 九  
礼 記 二 三 四 五 六 七 八 九  
居 二 三 四 五 六 七 八 九  
松 二 三 四 五 六 七 八 九  
五 二 三 四 五 六 七 八 九

とく  
一とこの後よ 八家のありけり  
くれまかりしすめ 依りてあふ  
親達のあふしも 依りてあふ  
明 面ゆき 顔く 盛る  
月之 花 蘭 相 女 子 趙  
壁 二 三 四 五 六 七 八 九  
一 二 三 四 五 六 七 八 九



細 祇が好まぬといふこと  
とく 師 祇が好まぬといふ  
たれ へん うち うち うち  
あひて 人づからきで  
と ねども つかれられ  
は

くもりおはさるゝのひかり  
服は八月日の光もそお  
やとてうらよりふのや  
よらんもつちうそと  
くくくく 細 葉の宿を  
くくくくくく 所を  
くくくくくくくくくく  
月日のくくく 細 月日の  
光もそおの光なり

ひろつゝそわめ月  
 目の方より照るととん  
 つゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ゆゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ぶぶげはほやまふの  
 ゆゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ふゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 くと合点ゆゝゝゝゝ  
 れゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 へゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 わゝゝゝゝゝ 細の終ゝゝ  
 わゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 へゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 げゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 くとゝゝゝゝゝゝゝ  
 のゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 ちゝゝゝゝゝゝゝゝ  
 らゝゝゝゝゝゝゝ  
 ひゝゝゝゝゝゝゝ  
 細八文現ねの内ゝゝ  
 度ゝゝゝゝゝゝゝ  
 とゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible][illegible]







いひけるなり  
細意の  
側邊よりこれにて  
わざよていふるを  
これに邊の留所なり  
へり

世の中のみちひも  
二宮位世間のゆかりえ  
みづく  
うとうとうやうやう  
益はまのうやう  
一と煮のねん  
かうくうくうく  
三姫をうらなふ世と  
てぬとくさんうらなふと鎮

[illegible]

しるしやうされたりふ  
 葉の句 葉並 葉のわご  
 いと 姫恋草といへん  
 はくけくーとてえ  
 ほうりくーとてはひま  
 くもーとてふれ或  
 こもくーとてやなり  
 ふあひつる花ぐづ  
 ふさうかうくや下に  
 とび羽にあり 汗海の夜  
 ゆかりなる 細 汗海并  
 花名の夜共 下月とく  
 のちくと 師 あは八雲の  
 ゐうんのちばををささ  
 うぶさ物のさうりうも  
 とつひひすそぬ物  
 よもまらんくはさひ  
 一まん  
 まいりきたるん 細 然勢  
 もささうつとてえ  
 ほうりくーとて 孟 弁の  
 柳本のうきうりしと  
 るてとて 細 柳本の罪  
 ともそひなとて

[illegible]



はんそうのふ納まのふあのと  
 こゝして 細舟のしづえ系  
 船とらりりハまのふあ  
 とハまハいとこゝ 栗田

草の葉は  
細 柳木の着  
 のうへひあまよふ  
 りくさうと

友人のうらぐり  
 孟舟ハ夢ハニウレトモ  
 葉ハ舟トウレトモ  
 二つを以て娘を産すも  
 うりうりんと推  
 産す

ふてなるれとい  
細くうぐいすもあ  
かきぬぐいとのひら  
うぐいすやうよお物よ  
ううい夜業のひら  
思ひも業のふえり  
唯 常馬ううぐいす  
うぐいす 孟回  
今いふいふと 細く  
ゆきぬいふふと  
うぐいすやうと

[illegible][illegible]



秋やうらやう  
細玄月

事と嘆くもの

てきまゝに  
うたへ

益人なる主君の所入

五ノハ魚ノノセ方ニモ

天竺國之西

あふはるのうた

くもるいふ

樓上先生

入  
く  
い  
祿  
／  
の  
こ  
こ  
こ  
こ  
こ  
こ

三  
二  
一  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

神

ありてさひきんくら

孟 勢之推々々々

姫君逢ふゆゑ意のこ

くろき

細  
心  
乃  
肉

のゝんごふとろり

了  
これゆゑに

ふくみふくみ

[illegible]

今、  
中  
の  
人

つゝふふふふふ

五ノ下ニテ

吾儕の人心を以て是を

卷之八

意の所たのむ素と實と因と

實作如左

しんがふらふらふらふら

秋の夕暮の雲の

[illegible]

白雲のふり

8

三  
姫君は八雲の心をせぬ  
なりては  
もわり

二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、

三娘是ハ八文の松をせぬ所は西巻をすもわり

准

七







[illegible]

孟<sup>タキ</sup> 藪<sup>ヨウミ</sup> 葉<sup>ハ</sup> 經<sup>サキ</sup> 文<sup>フミ</sup> 乃<sup>ナリ</sup> 採<sup>サイ</sup>  
 藪<sup>シ</sup> 及<sup>キ</sup> 葉<sup>ハ</sup> 賦<sup>フ</sup> 乃<sup>ナリ</sup> 採<sup>サイ</sup>  
 藪<sup>シ</sup> 好<sup>コ</sup> 採<sup>サイ</sup> 乃<sup>ナリ</sup> 採<sup>サイ</sup> 不<sup>フ</sup>

月々々々々の如かり  
 ゆくもてしとては  
 師人の御来をなぐさ  
 とみえんあもまび  
 しう痛し  
 ぬぐうなど 細かなるあ  
 髪のをちちうと  
 髪よりはおひよふ今  
 はさううやともゆま

ようのそとよりいづれくちりて  
 ばどのいそで勢ふ乃とくひて  
 ぶんとありわづらのひらりぞと  
 どやうのやうとそと細わりの初と  
 よろろあづくのひまにそとえ  
 ぐろろ月をいよらんそとて  
 うとをこりり山風をいづるわ  
 なるそとてちやあーそとや  
 法一づりてなるそとあがり  
 もいそえひそいゆさうそ  
 くちりてそとてりねくそと  
 まくそとてそとてそとて



惟

大用

海やうきうき  
大君  
懸る浅る反

懸乃漢之文侯

中  
考とてなるより久しう中のうへ

中

うんをぬきうぶるやうくぞ

二月廿五日

まことさうさや中納言のふかやう

之

うんとあがりて、おつくりをうとつと

人々を驚かす

しんきよふろあきんばるんぢぢぢ

ちりちりつてゐる式ア  
 也一法やそれ等の  
 奇とけ物候は用ゐる  
 白井は里乃庵とて  
 首と操用ゐるといふ  
 ずさむわどつとつ  
 うふふくそ細奇や  
 ろさささうわどよう  
 ろのめさうぬりつひ  
 差のさぬのともくさ  
 てうはへうつくと出  
 と娘まのう  
 倒しりと細い香中の  
 深切たうと孟は君う  
 差の由出のささぬ  
 ちとめさうぬ  
 細只と娘まの由候  
 くみる墨染るれん  
 師うめりなうとす  
 と候とつとつと  
 のゆわさうやうなる  
 ふ物とさうと孟服着  
 の具黒ゆりなれど  
 ううぬと差のおへぬ

奥山の松竹やこころをきくも春の世はうつろひつゝ  
 だよりづきむぐさよとてくらけの雪ふる 作人乃自  
 中希四十四帖はいえくざうう字活は動くは可の上の  
 易力はそれた山成のとてうも新格意は入るつあ  
 おもつるあわらふより 所出ぐるどゆうてもかり  
 のもとちうらん  
 うーう也 孟雲へ又贈るてもハまへていふます  
 ぬーうー  
 うう然ぢめめるぬけいひあくる  
 うう物うううう人のあううあう  
 ど心あうれまうれた例うりいられてが  
 むーうづひさつてううせ給うぞめる  
 らぬね大とげ地のかゝるうとらうぞ  
 りうううううひさうもようはけても  
 細なま  
 まのゆるううび給うれううるぞを  
 うどもあうりうういめ給うてん

經

七



49

ちうそのとい　たまふ  
 くもくもくもくとい  
 えとまゝ　きこふとい  
 移うつりぬき　細葉の  
 ふく人のふくうつりやも  
 ちう物　愚衆　葉にお  
 ちう道世のふれど　枝ゆふ  
 ちうづき物とちうく  
 文のふくち　くちう  
 ちう　益白恨ふちうハ中  
 ちのちけふちえんぬい  
 枝さつりちちとちと  
 ちちよちちちち  
 教ちち　ちちち

[illegible]

細 ちよの書とて白く  
りしあしとらん  
まゝの書とて

まゝあるん 細葉のふれ僅  
 りとまづさとしてせめ  
 まゝあり  
 りとまゝあり 細葉乃  
 つるにさぬよきなり  
 げぬりやろくの路へ  
 まゝあり 孟日  
 まゝあり 細い草の  
 里れちるべし 花よりさぞハ  
 とく 幽玄の位置のある  
 づよわたりなくにうらえ  
 んとの人のつくり人  
 びりあひあがりてむすんで  
 けりゆふなかりむし枝叶  
 たり香 花葉をうら  
 の葉肉は白きのやみふ  
 りこ  
 まゝあり、とると 細い花

くらふふのさぶあきどく<sup>白の</sup>うらうらねるやゆ  
 らんまよふんともくもさうてさせると  
 づここのむむづれあさねきさねるふ  
 りそそかひあやうぞし<sup>あはく</sup>あんな  
 ねむいりかたうくくあひまねど  
 里のちろづいこよあうもえわくび  
 ずしぬ紙<sup>おぼろ</sup>けは<sup>おぼろ</sup>いりもりしあ  
 えねん<sup>細白糸のききとさう</sup>まうは人いさうてあま  
 べめれふのそこあやううあううあん  
 すくあうりちねうりくしあまのね<sup>あま</sup>







うぬも世よりさういふれづきむさうぢあうぬとそりぢりうきとくそ  
 人のえきなり 曲意は自の心とて作くよりもよくあわうとて 師人の自まの心とて  
 ちうぬと意いよくあわうとてとて

とうりや 細 河海の没頭  
 之に 媒のあつてこそあつて  
 わりくうーれ 伴 媒とア  
 こハ切くけうもひては  
 ちうんとく  
 りつてのうーい 細 媒志  
 のう 愚索 け志の向ハ自  
 のうとつひてトハ我々  
 へのうとつひてトハ我々  
 へのうとつひてトハ我々  
 て中志のうとつひてトハ我々  
 とわいせどもとつひて  
 けくーけは 細 うぐ  
 らひのうとつひてトハ我々  
 とわいせどもとつひて

[illegible]

師いふわうはとえ何と  
やアんとつゝとてく  
ふりくババづう  
孟中君のふとこそせ  
所よりうけて作る  
よく煮の大煮へん  
所実ハ大煮の抜きのご  
とく煮のふち煮よ  
うけう細どもねども  
先づひのころ細く極を  
次は我々もものま  
それハ雪をかきけ  
細き力のふとさう  
解られはとぬづくの  
うは我々があう  
いづく君をよそ  
芳づりとらん日  
けくささせよう  
我ハ中煮のふと力  
のふと共く雪か  
まのうらうらづり  
しとせとせとわ  
さうはつひう  
さを歌う細く

[illegible]



このうゑに 孟 ちちをハ中表のわひつそそりサセハ内分別われとてし  
 ゐのうゑに 細 白文申文よ馬位まうてとて 栗田 師 白文の馬位まうてとてとて  
 まうと意のまうて  
 うゑとそれと 細 びまういづれとハ人の定むてとてとて 師 又びどのわうてとてとて  
 活一ふ好むう好むういづれのわうてとハ人えびとてとて  
 内分まうていづてこよくハ 細 意の向まうて 孟 白人の内分ハ分ぐとてとて  
 意の大表よむとて  
 うゑととてとてとて 細 うゑととてとて 孟 うゑととてとて  
 うゑととてとてとて

吾うさこ細あひでとハ  
 葉の方へぐりし海り  
 まつて孟大君寄る君  
 むすんでとハ葉へぐりて  
 てまつてもうとく  
 うそてさうか 晴初はか  
 ぐくくしてさういじ  
 まつて孟目  
 つらうとづ 細上白ハ衆  
 難なる所と云ふとてさ  
 ら下白に白まゝも  
 まづ秋月のわけせをも

---

よえこころやうねをぞす  
 全  
 吾うさこのひけう一志するぞみよき  
 つらうねをさぬおとうさてさう出まられど  
 葉の初より文しくうなとる表のものまあり  
 けいのわくぐいさそ中くこころをさられぬ  
 まめづかれとて  
 つらうさう海あともさう山何ともさ

[illegible][illegible]











我々もよものひかりんふあやしく 師 細田役ハ店の人のもねをきりあわハ  
作付られし 姫君ハいづるれど 我々も作せまゝに かつてつらき 弄り役  
これたの人 かつて 姫君ハあゝと云ふと 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

細 姫君のふれし げんごうりく 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ  
細 姫君のふれし げんごうりく 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ  
細 姫君のふれし げんごうりく 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ  
細 姫君のふれし げんごうりく 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

細 姫君のふれし げんごうりく 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ  
細 姫君のふれし げんごうりく 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ  
細 姫君のふれし げんごうりく 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ  
細 姫君のふれし げんごうりく 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

中

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ

弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ 弄り役ハ











四の女房等の御へ  
 あつた子もいそあれそのゆき丁を  
 一也いそとよみあがりおこがゆ  
 のほきろくせとてみえたりうそえどくろり

もてにけうじよひてあさくさ

うじうじあるこよととんとやうも  
細中秀久  
ア、先ひより出て、お丁よりうしろぞ

とちゅうにさうしてまゐる人々なるなり。

せむしうらぎよあまうてどぞひさう  
 くそでもぬきうづとそむやうは後所  
 しげうら人のうらうらうはとぞ  
 とぬねるうんとてまきでうらの

海もどかすべしと母の言なりしも  
細大看之用を以  
 思ふべしとされしとらふに  
こころを  
 思ふべしとされしとらふに  
こころを  
 あれとてとせまつ家司とてとらふと











